

メカジキ 南大西洋

Swordfish, *Xiphias gladius*



管理・関係機関

大西洋まぐろ類保存国際委員会 (ICCAT)

漁獲の動向

はえ縄の混獲であった1980年代末までは、総漁獲重量は1万トン未満と少なかった。本種を対象としたスペインのはえ縄船団が参入した1989年から漁獲量が急増し、1995年には総漁獲量は21,930トンでピークとなった。1995年以降は、規制の導入、努力量の他の大洋への移動及び主対象魚種の変更により漁獲量は減少した。2018年の総漁獲量は10,404トンであった。日本のはえ縄漁船は、主漁場が北大西洋に移り、努力量の減少で漁獲量も大幅に減少し、2018年の漁獲量は640トンとなっている。

生物学的特性

- 体長・体重：下顎叉長 4.68 m・500 kg
- 寿命：調査中
- 成熟開始年齢：調査中
- 産卵期・産卵場：熱帯～亜熱帯域
- 索餌期・索餌場：アフリカ沿岸・ウルグアイ沖合水域
- 食性：調査中
- 捕食者：調査中

利用・用途

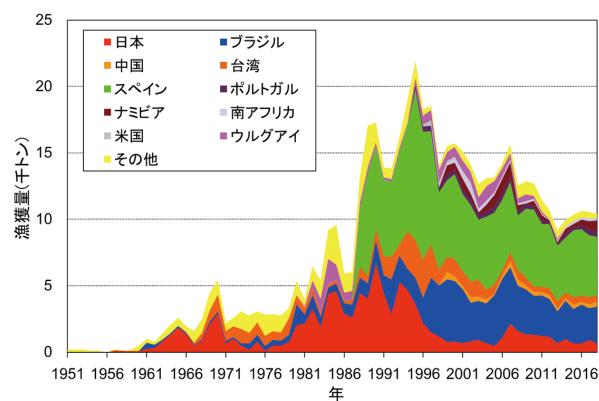
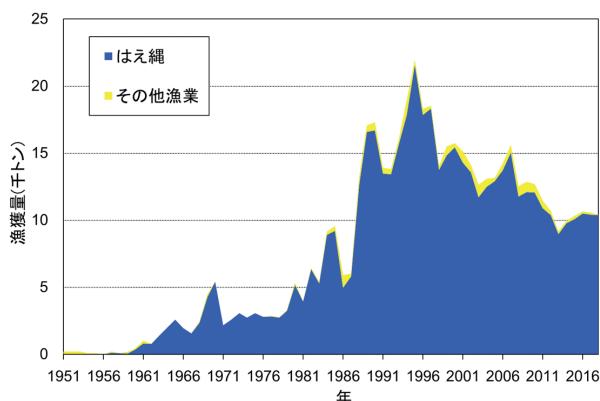
刺身、寿司、切り身（ステーキ）、煮付け

資源状態

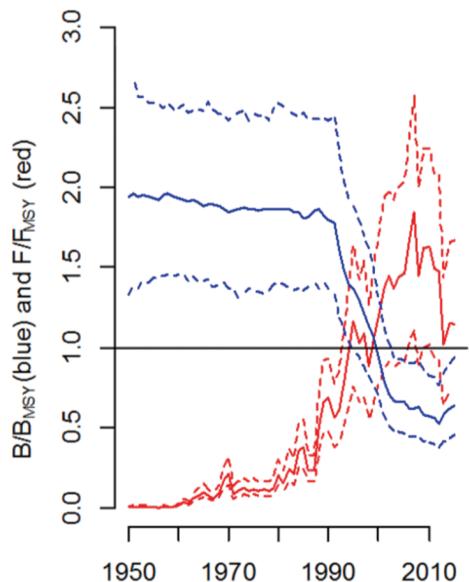
最新の資源評価は2017年にICCATの調査統計委員会 (SCRS) によって1950～2015年までのデータを用いて実施された。資源評価にはJust Another Bayesian Biomass Assessment (JABBA) 及び Bayesian Surplus Production 2 (BSP2) が用いられ、資源量指標と将来予測の計算にはJABBAが、感度解析にはBSP2が使用された。両モデルともに資源量指標として、日本、台湾、スペイン、ブラジル、ウルグアイ、南アフリカのはえ縄の資源量指標を使用した。2種類のモデルによる本種の資源評価結果の結果は概ね一致していた。JABBAの結果から本種の資源状態は乱獲状態 ($B_{2015} / B_{MSY} = 0.72$) にあり、漁獲は過剰漁獲の状態 ($F_{2015} / F_{MSY} = 0.98$) ではないものの、MSYレベルに近いことが示された。また、SCRSは、JABBAを用いて2028年までの将来予測を行った。漁獲量を既存のTAC (15,000トン) とした場合では、10年後にMSYレベルに回復する可能性は26%であり、50%の確率で資源量と漁業をMSYレベルにするためには漁獲を14,000トンに減少させる必要があることが示唆された。

漁業の特徴

1980年代末まで主に日本、台湾、韓国のはえ縄の混獲として漁獲され、漁獲量は少なかった。1989年から本種を目的にはえ縄の浅縄操業を行うスペインの船団が参入し、漁獲量が増加した。



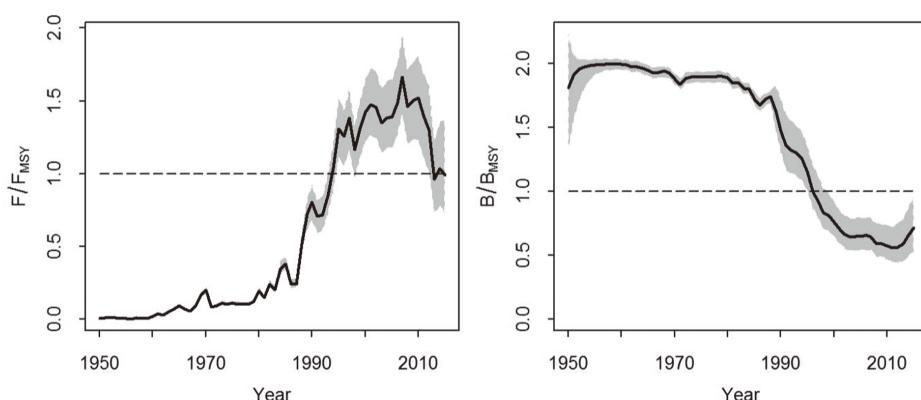
管理方策	
<p>ICCATは2014～2017年の間、各年15,000トンのTACを設定していたが、2017年のICCAT年次会合において、2018～2021年までのTACを14,000トンとした。日本の割当量は901トンである。国別割当分を超過もしくは余った場合には、2年後の割当から差し引きまたは上乗せを行い調整することができる。ただし、調整分は前年の割当量の20%を超えない範囲とする。</p> <p>現在、大西洋全域について、①下顎叉長125cm／体重25kg未満の個体の水揚量を15%以下に抑える、または②下顎叉長119cm／体重15kg未満の個体の水揚量を0%にする（投棄量の評価含む）、という2種類の最小体長規制がある。2006～2008年の大西洋全体で水揚げされた125cm以下個体の割合は24%（尾数）と推定されている（北系群では28%、南系群では20%）。</p>	



BSP2で推定された相対資源量 (B / B_{MSY} : 青線) 及び相対漁獲係数 (F / F_{MSY} : 赤線)
実線は推定値、破線は90%信頼区間。

メカジキ(南大西洋)の資源の現況(要約表)	
資源水準	低位
資源動向	増加
世界の漁獲量 (最近5年間)	9,956～10,658トン 最近(2018)年: 10,404トン 平均: 10,383トン(2014～2018年)
我が国の漁獲量 (最近5年間)	637～976*トン 最近(2018)年: 640トン 平均: 765トン(2014～2018年)
管理目標	MSY: 約14,600トン
資源評価の方法	JABBA、BSP2
資源の状態	$B_{2015} / B_{MSY} = 0.72 (0.53 \sim 1.01)$ $F_{2015} / F_{MSY} = 0.98 (0.70 \sim 1.36)$
管理措置	<ul style="list-style-type: none"> 2018～2021年のTACを各年14,000トン（日本の割当は901トン）とする。国別割当について、割当分を超過もしくは余った場合には、2年以内であれば差し引きまたは上乗せを行い調整することができる。ただし、調整分は前年の割当量の20%を超えない範囲とする。 下顎叉長125cm／体重25kg未満の個体の水揚量を15%以下に抑えるか、下顎叉長119cm／体重15kg未満の個体の水揚量を0%にする（投棄量の評価含む）
最新の資源評価年	2017年
次回の資源評価年	2021年

* この値は日本の近年の漁獲割当量を上回っているが、これは、ICCATの合意に基づいた過去の漁獲割当の未消化分の漁獲が含まれているためである。



JABBAで推定された相対資源量 (B / B_{MSY} : 右図) 及び相対漁獲係数 (F / F_{MSY} : 左図)
灰色は95%信頼区間。